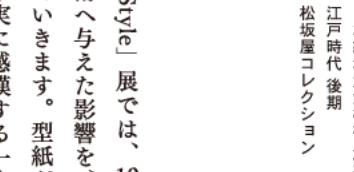


「極小の宇宙 手わざの粹—伊勢型紙の歴史と展開—」展 (県民ギャラリー)

伊勢型紙・江戸小紋記録映像



御深井袖襦袢手付鉢
17世紀
多治見市教育委員会



「KATAGAMI Style」展では、19世紀後半以降、海外へ渡った型紙が現地の美術へ与えた影響を、地理的にも内容的にも広範囲にわたって辿っています。型紙が国境や文化を越えて多くの人に愛されてきた事実に感嘆する一方、私たち自身が、型紙そのものについて、ほとんど何も知らずにいたことに驚きを禁じえません。

一体型紙とはどのように作られ、用いられ、伝えられてきたのか。県民ギャラリーでは、そんな疑問に答えるべく、型紙の歴史と展開をたどる展示を企画しました。

型紙とは、着物や浴衣の文様を染めるための用具です。型紙を用いた染色技法を「型染」と呼び、代表的なものに江戸小紋や高級浴衣である長板中形があります。和紙や柿渋、米粉に糠といった、日本の風土に根差した材料を用いて、世界でも類を見ないほどに高度に洗練された染色技法を発展させました。

型紙といえば、すぐに「伊勢型紙」という言葉が出てくるほどに、型紙と三重県には深いゆかりがあります。江戸時代に現在の鈴鹿市白子・寺家地方が、徳川御三家のひとつ、紀州徳川家の領地になつたことを契機に、型紙販売商人は藩との関係を密にし、型紙を全国に行商する際の特権の数々を手に入れ、他の産地を圧倒しました。

同じ文様を、繰り返し写すことができるという型紙の特性は、染色以外の分野にも応用範囲を広げていきました。17世紀から18世紀にかけて岐阜県美濃地方で盛行した「御深井焼」と呼ばれる陶器には、花や波などの柄が擠りこまれていました。また、鹿革に漆付けをする「印傳」は、山梨県甲府市を中心に生産され、菖蒲や蜻蛉、桜などの文様が展開されています。

展覧会では、鈴鹿市に残る江戸時代の貴重な型紙を始めとする型紙の歴史をたどる資料とともに、着物や器や小物類など、型紙を用いた作例もご紹介し、その多様な方を振り返っていきます。「KATAGAMI Style」展と合わせてご覧いただることで、国外・国内にわたっての、型紙をとりまく、深く、豊かな世界を体感していただけると期待しています。(Iy)

※会期中展示替えを行います。最新の情報は美術館へお問い合わせください。

近く生誕百年を迎える鈴鹿市出身の抽象画家浅野弥衛(1914~1996)の生家は屋号を松葉屋と称し参宮街道に面した刻み煙草の仲買商であつた。江戸時代松葉屋も白子の港から江戸の大店へ煙草を運び商いをしていました。更に茨城には水府葉という煙草葉の特産があり、その縁で土浦に浅野家ができ、江戸時代以来の親戚付き合いを今もしている。浅野の絵画の美意識や感性は天性的なものに加え幼少時からの文化交流も遠因していた。

浅野のアトリエは安政地震にもかろうじて耐えたというそんな古い商家の店先をそのまま改装したものであった。その生家のある地を古くは伊勢神戸といい古代伊勢神宮の莊園地で戦国時代には織田信長の三男信孝が築城と町並み整理をなした古い城下町である。その後、江戸時代に荻生徂徠門下でもあつた本多伊予守忠統が膳所から入城しわずか一万五千石の小藩ながら代々文人城主が明治まで続いた。かつて明治文壇の鬼才と謳われ森鷗外、幸田露伴らと交遊をもち樋口一葉のよき理解者としても知られる斎藤緑雨や歌人で万葉学者佐佐木信綱の母(岡元光子)なども本多侯の典医と家臣の出自であった。

そんな小さな城下町伊勢神戸の地は文人大名が続いたせいか和歌や俳句や武芸ごとが盛んで他方多くの職人が住む町でもあつた。今はその痕跡はすっかり絶えているが伊勢神戸にも家内的な型紙職人や絵師や塗師がいてそれなりの商いをしていたようである。浅野家の家系や周りにも絵師や塗師がいてその遺品が現存する。また近年浅野家の仏壇から次のように記載された古い過去帳が見つかった。それは江戸時代中頃の記録で白子寺家の型紙商「山中権四郎の母は松葉屋の姉」とありこう

※美術館のコレクションII(7月10日「火」~9月30日「日」)では、「特集展示 浅野弥衛」として、鈴鹿市出身の画家、浅野弥衛(1914~1996)の作品を展示します。

三重県立美術館友の会へのお誘い
支える団体として、研修旅行、美術講演会、懇親会など、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深めています。年会費: 3,000円 入会金: 500円
一般会員: 5,000円 入会金: 1,000円

会員鑑賞券配付、観覧料半額、美術館に関する情報提供のほか、レストラン、ミュージアムショップのご利用にも割引があります。詳細は、三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館協力会
賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成発行、鑑賞団体への援助など、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。協力会の主旨に賛同いただき、賛助会員への加入をお願いします。

会費
年間一口人: 25,000円 法人: 50,000円
年間個別会員: 10,000円

セブションへの招待、各展覧会ならびにレセプションへの招待、各展覧会毎のカタログ贈呈や美術館活動に関する情報提供などの特典があります。詳細は三重県立美術館協力会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

三重県立美術館ニュース

31 HILLWIND

浅野弥衛と伊勢型紙の周辺 衣斐弘行(鈴鹿市文化財調査会会長)

した縁のあったことが知られる。

話は少し余談になるが前述の斎藤緑雨に幸田露伴が伊勢型紙のことと問合せ、それに返答した手紙(「斎藤緑雨全集」第八巻所収)がある。それを見ると緑雨は露伴に丁寧に応え末尾に、「先づためしに浅草へ御出向くなり候はゞ、それは向柳原町二丁目一番地中村仁三郎」を訪ねるように書いている。実はこの中村家の先祖は白子寺家の出で緑雨の妹志うは上京後中村家の養女となつて夫仁三郎を迎えた。緑雨が露伴に答えた伊勢型紙に関する知識はその縁による。

また、養女ということで併記しておくところも江戸時代から白子寺家で型紙業を営んでいた山中権十良の養女となつたのが歌人山中智恵子(1925~2006)であった。この山中権十良家と先の浅野家から嫁いだという山中権四郎家とがどういう関係かは目下判然としないが後年浅野弥衛と山中智恵子との交遊を思うと何か不思議なえにを感じないでもない。二人の交遊の一端として昨年末刊行された山中智恵子の歌論集「椿の岸から」(砂子屋書房)のなかの「歌人日乗」(昭和56年2月25日)に、「浅野弥衛さんの個展。名古屋桜画廊へ。紙に鉛筆のフロッタージュがよかつた。古い古い机の無数の創の上にケント紙をあてて、鉛筆でなぞつた不可思議な絵。」とある。

浅野は常常画業のことで問われると、「自分はアルチザン」と語っていた。それは例の油彩の「引っ搔き画」の技法をはじめその作品群の多くが職人技であつたことを意味していた。浅野の抽象絵画の底流には型紙職人が育んできた極めて鋭利でストリックな精神性と技が遠い先祖の血のなかで共存しているのかもしれない。



伊勢型紙彫刻道具(道具彫り)撮影:宮川邦雄

記録映像撮影風景

型紙に触れた人は、誰もがその精妙な技の冴えに見入ります。一体どうすればこのようなものがなしえるのか。感動と驚愕とが同時に湧き起ってきます。いくら言葉を尽くしても、師匠から弟子へ脈々と受け継がれてきた伝統の神髄は、語りつくせるものではありません。今回の展示を受け、伊勢型紙と江戸小紋についての記録映像をまとめました。

撮影は、伊勢型紙技術保存会、鈴鹿市、そして群馬県の藍田染工さんとの協力を得て、2012年1月~3月にかけて行われました。ここで目指したのは、映像としての華麗さではなく、記録としての「公平さ」でした。これまで何度も伊勢型紙や江戸小紋に関する番組が制作されたが、大半が彫り立ち止まることのない執念、そして職人としてのゆるぎない誇りでした。人の手によるものである以上避けられない「癖」をいかにして消し去るか。一見単調で面倒な作業を繰り返す中に、年月を積み重ね導かれた「答え」が隠されていました。

メモを向けました。

「現場」に立ち会う中で実感したことは、すべての作業を貫く、歪みや偏りのない「美しい文様」を生み出すための工夫と、立ち止まることのない執念、そして職人としてのゆるぎない誇りでした。人の手によるものである以上避けられない「癖」をいかにして消し去るか。一見単調で面倒な作業を繰り返す中でなく、そこに至るまでの準備段階や道具の作成過程にもカメラを向けました。

「現場」に立ち会う中で実感したことは、すべての作業を貫く、歪みや偏りのない「美しい文様」を生み出すための工夫と、立ち止まることのない執念、そして職人としてのゆるぎない誇りでした。人の手によるものである以上避けられない「癖」をいかにして消し去るか。一見単調で面倒な作業を繰り返す中でなく、そこに至るまでの準備段階や道具の作成過程にもカメラを向けました。